

同窓会報 古 城

第 35 号
発行者 武義高等学校 同 窓 会
題 字 藤 田 多 美 (高21回)

【伝統訓】
梅は 霜雪を うま ず
清香を 経て おく せ ず
発す たくま しく



同窓会会頭 土本 恭正 (高28回)

当然物の流れも良くなりお金の流れもよくなり、徐々にではありませんが三年続いたコロナのダメージから復活しつつあるなど感じています。高校生も昨年は各種大会が普通に開催され、武義高校も県大会等で活躍してくれました。ようやくこの一年は普通の高校生活を送れているのではないのでしょうか。

しかし三年前に入学した今年の卒業生は、入学以来ずっとマスクをしての高校生活。素顔を知らない同級生が多数いるようです。でも元気な高校生活を送ってこの三月に巣立っていつてくれるでしょう。残された一年生二年生も、ようやく普通の高校生活を満喫してくれることと思います。

我々同窓会としましては、そんな頑張っている武義高生を全力でバックアップしていきたいと思えます。武義高校の生徒たちは様々なボランティアを通して地域に根差した活動をし、この地域になくはない存在として活躍してくれています。古城会会員の皆様の益々のご支



援をよろしくお願いいたします。

令和四年度を振り返って



校長 瀧下 博幸

同窓会の皆様におかれましては、日頃より本校の教育活動に

温かいご理解とご支援を賜り、心より感謝を申し上げます。

昨年度の一〇〇周年記念行事では、校門の改修工事、梅華塾の空調設備の改修をはじめ、記念式典の挙行、記念誌の発行等、大変お世話になりました。また昨年度末には、県の予算によるグラウンドの全面改修も終え、お陰をもちまして生徒は更に素晴らしい環境の中で、勉強や部活動、ボランティア活動など、一生懸命に取り組んでいます。

今年度も学校現場は教育活動と感染対策を両立しながらの運営となりましたが、昨年より徐々に再開できるようになり、九月には二年ぶりに文化祭を開催しました。生徒たちは限られた厳しい条件の中で最大限にできることを考え、ステージでの演劇、クラスや部活での展示等を行い、大変充実した二日間の文化祭を実施してくれました。PTAの方々は、コロナ禍により、例年の食品バザーではなく夏祭りで行うような縁日を催し、ゲームやくじなど趣向を凝らして大変盛り上げていただきました。

部活動においては、テニス部が男子、女子ともに団体で県ベスト8、水泳部がモデルリリーで県3位、サッカー部がフットサル大会で東海大会出場、陸上部がやり投げで全国大

会出場、美術部が県青少年美術展で入選、MSリーダーズ・家庭クラブが「小さな親切運動」で受賞、科学部が全国高校生料理コンクールで優秀賞など、様々な大会で成果を出しました。他にも、吹奏楽部が美濃市総合フェア、複数の部が美濃市駅伝、野球部が市民登山大会に出場するなど地域を盛り上げ貢献しています。

五年ぶりの総会開催に向けて

今年がコロナが収束して東京古城会総会が開催出来るのではと期待しております。

五年ぶりの総会開催に向けて

名古屋古城会会長 山口 啓三 (高13回)

名古屋古城会は、昭和の末期から休眠状態に陥っていた組織を、平成二〇年に再建し、以後、隔年に総会を開催してきました。平成二八年には美濃市出身の落語家入船亭扇治師匠(33回生)を、平成三〇年には同じく美濃市出身の講談師神田京子先生を招き総会を開催してきましたが、令和に入り、コロナ禍により感染防止を優先し、総会を中止せざるを得なく、以後開催できておりません。

この五年近くの空白の影響は大きく、健康上の理由などにより役員や会員の退会等が多くあり、組織力が低下しました。このため組織の活性化と若返りを目指して、三〇〜三四回生で愛知県内に在住の方々に、名古屋古城会の存在を認識していただき入会をお願いしました。その結果新たに入会された方々とともに、五年ぶりに総会を開催しようと決意を新たにしている

ところであります。このため令和五年五月二二日(日)に総会の開催を予定しています。現下のコロナ情勢でどのような総会が開催できるのか模索しており、皆さま方におかれましてもご支援をお願い申し上げます。

『猫の三寸返り』森 基 要 先生 (中学21回卒) を偲んで

同窓会顧問 川嶋 智孝 (高9回)

森先生は旧制武義中学校を卒業され柔道の始祖嘉納治五郎が学長であった東京高等師範学校(現筑波大学)へ進まれ昭和二四年三月卒業、母校武義高校へ教師として赴任され、昭和三八年まで武義高校で教鞭をとり、柔道部顧問として武義高校を昭和二六・二七年の二年連続で岐阜県高校柔道大会優勝の実績を上げられました。



私は森先生に武義高校在学中の昭和二九〜三二年、体育の授業で指導をいただきました。その際、部活の柔道着を使うことがあり使い込んだ帯が切れて部活の先輩に大変お叱りを受け弁償したことが思い出されます。七〇年近く前のことです。その後森先生は昭和三八年新設・国立岐阜工業高等専門学校へ転職、定年を迎えられ退官、平成二年名誉教授とられました。学校のほか、退官後もお住いの糸貫町柔道少年団をはじめ金曜合同練習会(岐阜メモリアルセンター)・韓国体育高校・台湾大学・高専柔道部など青少年の指導、また名古屋大学・岐阜大学をはじめ各大学の先生方との共著で健康学の著書もたくさん著述されています。更に体格体力判定について、平田欽逸医学博士(平田医院院長・中5回卒)が進めていた平田式体格体力判定法の研究所でも活躍されました。体育学会や体力医学会での研究は地域の生徒児童や先生のご協力により全国的な「判定図」が完成し判定が可能になりました。平田博士の亡き後も急ぎよ引き継ぎその作業を進めておられました。

森先生は「モツサ」の愛称で皆さんに慕われ古城会へ毎年出席いただきました。平成二二年度の総会で「猫の三寸返り」と題して講演をいただきました。御息が亡くなられてすぐのことで大変な時でしたが、会頭であった私にも言われなくて終わってから知りました。

猫はどんな高さから落ちてしても躰を返して四足でしっかり着地するたどえで、三寸(約9cm強)の高さがあればその姿勢ができるというわれています。講道館四天王の一人西郷四郎(身長154cm・姿三四郎のモデル)が得意とした受け身の技で小柄な体格の彼をもじってつけられたものです。

先生は美濃市での柔道大会にはいつもご出席頂き、春、桜の咲くころには教え子の皆さんと小倉公園の屋台で「でんがく」を食べる機会をつくれ多くの教え子たちと楽しい時を過ごされていきました。又先生が個人的に「木瓜(ボケ)の会」という楽しい会も持たれていました。今回本文で書かせていただいた内容は講道館八段昇段記念として発行された「木瓜の柔道読本」を中心に古城一〇〇年史及び私が森先生にお付き合ひの思い出をもとに書かせていただきました。言葉足らずの処もあると思いますがご容赦ください。

先生の安らかなご冥福とお祈りいたします。

元岐阜県柔道協会会長 日本柔道連盟参与・講道館理事

元日本教育医学会会長代行
その他多数の役職を兼務
講道館八段 平成二三年
瑞宝小授章受賞 平成一八



同窓会総会での講演

アイク・ミユウラ代表

池村 周二



生には幾度となく呼び出され、進級できないぞと叱られる日々でした。それでも夢の大きさは誰にも負けませんでした。その夢というのが「自転車日本一周」です。同級生からはバカにされ、からかわれ、それでも夢はどんどん膨らんでいきました。卒業して二年後、その時は訪れました。約四か月間、距離にして約一万キロ、自転車で日本一

私は在学中、どちらかというところ落ちこぼれでした。先

中、どちらかというところ落ちこぼれでした。先

周を完走しました。文章に書けば数行の話ですが私の人生の中では数千ページにも匹敵します。日本一周中は様々な方に助けをいただきました。それも困ったときに、誰にも頼る人がいないときに助けてもらった御恩は今でも忘れることができません。その思いがあるのか、観光協会在職中は、困っている観光客の力になりたい、お役に立ちたいと人一倍思っていたのではないかと思います。これは日本一周の時に助けていただいた方々に恩返しをしたいがそれも今では叶わない、であるならば目の前で困っている観光客に恩返しのもつもりで「恩送り」をして喜んでもらえたらと思ったものです。「恩送り」とは親切にすることを言います。その甲斐あつてか、美濃市に行くというより私に会いたいという方が国内外を含め増えてきました。その時は心から嬉しく感じたものです。これが本当の観光だ！「観光は場所が決まるのではない、そこにいる人だ！」と思えた瞬間でした。観光地は何かと施設や景観などを重視します。それはそれで良いのですがその前に大切なことを忘れていると私は全国の講演会でもお話しさせていただいています。私が自転車日本一周という夢

を達成したことで気付かせていただいた、人と人の温かいふれあいこそが本来の観光の姿だと確信しています。武義高の生徒さんたちにもぜひ国内外のいろんな世界を見ていただき、見分を広げ、経験をさせていただきたいと思えます。



在校生の活躍

陸上部 朝田千裕

第25回東海高等学校新人陸上競技選手権大会の「種目 やり投げ」に出場させていただきました。私がやり投げを始めた理由は、小さいころからバレーボールをしていて肩の強さには自信があつたからです。そのころに兄がやり投げをしていて、わたしもやり投げに興味を持ち、挑戦してみたいと思ひ、高校から

陸上部に入学しました。始めた当初は、長いものを投げたことがなかったので戸惑いましたが、兄の投げる姿やコーチなどの指導で力加やりに伝わり、まっすぐに投げられるようになり、とてもうれしかったです。最初に出場した東海大会では、周りは強い選手ばかりでしたが、挑戦する気持ちで持てる力を出しました。しかし、よい記録は出さず悔しい結果でした。このことで、より強い選手になりたいと思うようになりました。そこから、自分の動きをしっかりと見直し、改善しては見直すといった繰り返しで投擲フォームや助走を改良しました。その結果、大会に出場するたび記録を更新することができました。岐阜県新人大会では、ピリピリとした緊張感が漂う中、自分の投擲に集中し、自己ベストを更新し、2位に入賞することができました。練習の中で教えてもらったことがしっかりと体に伝わっていることが分かり、とてもうれしかったです。

東海大会では、1投目の投擲であまりよくない記録を出し、焦る気持ちがありました。しかし、諦めずにわたしなら勝てると思ひながら投げると、6投目の投擲で岐阜県新人大会の記録よりも良い自己ベストを投擲することができました。結果は4位でしたが、まだまだ上には強い

選手が大勢いることを知ることができました。そんな人達も同じ高校生です。その中でも勝ち残れるように日々の練習に真剣に取り組み、全国で入賞できるように努力していきます。

サッカークラブ 小森 蒼太

私たちサッカークラブは、専門分野とは違う競技であるフットサルの県大会を勝ち抜いて東海大会に出場しました。はじめ、このフットサルの大いへの参加は「思い出作りとして出てみようか」というところからスタートしました。全員フットサルの経験があるわけでもなく、ろくにルールもわからないままスタートした挑戦でした。動き方も何もわからず、「こんなんで試合になるのか」と強い不安を感じていたのを今でもはつきり覚えています。しかし、顧問の先生の協力のもと全員でルールを覚え、放課後ミニゲームを繰り返し必死になつて勝ちを目標にトレーニングを重ねました。トレーニングを重ねる中で大会の目的が「思い出作り」から「絶対に勝ち上がって東海大会に出場する！」に変わっていききました。この思いはみんな一緒だつたと思ひます。

県大会当日、周りはフットサル専門で今まで必死にトレーニングを重ねてきたチームばかり

ことだと思つた。将来ずっとずっとやっていけるものがあるのならそれは絵しかないと胸に決めた。だから部活はただの楽しい経験ではなかった。自分に未来を見せてくれたものなのです。それもきつと一緒に絵を描いてくれた仲間たち、最後まで指導していただいた先生方のおかげです。人生の中でこの部活を忘れることはありません。

で、アップを見ているだけで物凄くプレッシャーを感じていました。私たちがそのプレッシャーに負けずに必死になつて試合直前までミーティングとトレーニングを繰り返しました。簡単な試合なんてものは一つもなく、苦しい展開にもついていかれる場面も多々ありました。ただ、私たちが自分達がやってきたことを信じ、仲間を信じ、同じ目標に向い仲間と一致団結した結果、県3位という成績で東海大会への出場が叶いました。

それから、県大会の結果、経験を踏まえてより一層勝ちへの思いが強くなり東海大会で勝てるチームにするべくより厳しく、戦術的なトレーニングを重ねました。

東海大会ともなると各県で勝ち上がってきた猛者ばかりで1勝を挙げることは叶いませんでした。大きな目標にみんなを取り組んだ時間はとても楽しかったし、大切な時間でした。なにより、今後味わうことはないくらい東海大会という大きなステージに連れて行ってくださった顧問の先生方、共に戦ってくれたチームメイト、「がんばれ！」と声をかけてくれた仲間、ほかに私たちを支えてくださったすべての人に感謝したいです。高校最後に最高の経験、思い出ができました。

写真は写真とどんなものかと思ひますか？こう聞かれると難しく、そもそも答えなんかあるのかと考えると思ひます。正直いつて考え方は人それぞれだし、どの考え方も正解だと思ひます。だから1つの考え方でして写真についてかかせてください。

写真部 梅田 菜々子

私は写真部に入るまで写真とはかっこよく言つたら自分の人生で見た出来事の一部分を切りとつたものだと考えていました。綺麗な景色や偶然撮れた奇跡の写真など、そこでパッとま

だと思ひますか？皆さんは写真とはどんなものかと思ひますか？

美術部 サムエルソウザ

私は試して美術部に入りました。絵は以前から好きで、それに関係ある仕事に就きたいと思ひ、その気持ちを確認する方法として美術部に入部したので

の次に描いた絵はなんと全国コンクールに出すことができなかつたが、その次に描いた絵はなんと全国コン

ンクールの出ることができました。自分の考え出せる限りのアイデアを1つの絵に詰め込んで下書きを完成させました。その絵はこれまでの中で一番強欲なものでした。絵の具を塗り始めると私は少しずつ気づいてしまったのです。この絵を完成させるためには予想以上の時間が必要であつたと。そして当然のことながら、作品はコンクールの締め切りに間に合わず、選ばれることなく帰ってきました。「全国だから当たり前か」と心の中で思う反面、私の中にまだ心残りがあつたのです。「もつとやれていた」。その気持ちを胸に私は絵の続きを描き始めました。正直に言うとな然然しくな

も夕方6時まで残つて絵を描き、慣れないその習慣に身も心も疲れ切つていました。でも不思議に私はやめなかつた。気づいたら絵を描き続けていた。その努力の結果、最優秀賞をとることができたのです。もちろん嬉しかったですが、それ以上に私はあることに気づきました。絵は楽しいだけではない。美術の道を歩むことがその気持ちと付き添うことだと理解した。そして、これを機に私は芸術大学を目指すことに決めた。楽しいときに喜び、苦しいときは止まらずに、それが私にとっての絵であり、本当の意味での好きな

ことだと思つた。将来ずっとずっとやっていけるものがあるのならそれは絵しかないと胸に決めた。だから部活はただの楽しい経験ではなかった。自分に未来を見せてくれたものなのです。それもきつと一緒に絵を描いてくれた仲間たち、最後まで指導していただいた先生方のおかげです。人生の中でこの部活を忘れることはありません。

- 主な部活動表彰 ●
- 陸上部
 - 岐阜県高等学校総合体育大会 女子やり投 二位
 - 岐阜県秋季陸上競技大会 男子やり投 六位
 - 女子やり投二位 五位
 - 岐阜県高等学校新人対校選手権大会 女子やり投一位 八位
 - 東海高等学校新人陸上競技選手権大会 女子やり投 四位
 - 全日本フットサル選手権岐阜県大会 第三位
- 写真部
 - 明治安田生命2022 マイハピネスフォトコンテスト 佳作
 - 岐阜県高等学校写真コンテスト 奨励賞
- 科学部
 - 全国高校生理科コンクール 優秀賞
 - 岐阜県高等学校総合文化祭自然科学部系部活動研究発表・交流会 優秀賞
 - 岐阜県児童生徒科学作品展 入選
 - AITサイエンス大賞ものづくり部門 優秀賞
- 書道部
 - 高等学校総合文化祭書道展個人作品部門 入選
 - 岐阜県青少年美術展少年部書道部門 入選
- 美術部
 - 岐阜県青少年美術展絵画の部 入選
 - 岐阜県高等学校総合文化祭美術・工芸展 奨励賞
 - 中濃地区高校美術展 優秀賞 奨励賞